

## 「100人の人口増より、1人の魅力的な移住者」

### 経営トップ講義

@県立大 2019~20

「ビジネス経済の実践」要旨

⑦



「魅力的な移住者を呼び込みたい」と話す福田氏

県立大佐世保校(山下哲嗣撮影)

波佐見空き工房バンク主宰

福田 奈都美氏(36)

福岡県出身だ。デザイン会社などを経て、九州・山口のグルメや旅行雑誌を発行している福岡市の出版社に就職した。編集の仕事が3年半ほど経験。町おこしについて取材したことがきっかけで、30歳で地域おこし協力隊になった。「物づくりの町」に魅力を感じ、東彼波佐見町に応募した。

福岡県出身だ。デザイン会社などを経て、九州・山口のグルメや旅行雑誌を発行している福岡市の出版社に就職した。編集の仕事が3年半ほど経験。町おこしについて取材したことがきっかけで、30歳で地域おこし協力隊になった。「物づくりの町」に魅力を感じ、東彼波佐見町に応募した。

## 「町ならではの」を大事に

協力隊の任期は3年。その中で成果を残すために、自分

が得意なことから始めようと思った。記者時代の経験を生かし、祭りのポスターや陶郷・中尾山を紹介する冊子を作成。これまでにないものも作るうと思、町内にある金屋神社をPRするために波佐見焼のお守りやおみくじ、絵馬を作った。神社を知ってもら

い、波佐見に来てもらうきっかけづくりができた。1年半がたったころ、波佐見空き工房バンクを立ち上げた。町外の陶芸家から「波佐見に拠点を移したいが、物件が見つからない」と相談を受けたこと、波佐見が町独自の移住プロモーションを展開

きていないと思ったことがきっかけだ。波佐見焼の工房跡に目を付け、物づくりの町ならではの移住事業を始めた。不動産についての知識がなかったため、不動産会社に協力を依頼。賃貸契約の仕組みや空き工房をどのように活用すべきかを一緒に考えてもらった。

活用モデルとして、空き工房を自ら改修した。築年数不明の木造の建物を、趣や雰囲気を残してリノベーション。2017年7月に波佐見空き工房バンクの事務局としてオープンした。気軽に移住の相談ができ、町内の人も立ち寄りやすい場所として活用している。協力隊の任期を終えて、独立した。波佐見の魅力

するイベントの企画や運営、移住促進を図る冊子作りなどを行っている。波佐見空き工房バンクは町から業務委託を受けて引き続き運営。食品サンプル会社など、6組が空き工房を活用している。人口を100人増やすより、1人の魅力的な移住者を呼び込むことを目指している。1人の魅力で町が大きく変わることもある。空き工房には陶芸家だけでなく、いろんなジャンルの作家に来てほしい。「焼き物の町」から「物づくりの町」に変わってほしい。もっと面白い地域になると期待している。

町おこしにはそれぞれの町にあったやり方がある。ほかの地域の成功例をまねしても、うまくいかない。その町の魅力や課題をよく見極めて、その町ならではの企画をすることが大事だ。(湯村高大)

次回(17日)に掲載します